

診療所事務長はどんな仕事をしているのか。そんな疑問に、一般社団法人診療所事務長会のメンバーが答える。6回目は、医療法人秋桜会事務局長の新井川真佐子氏だ。

理事長が交通事故で亡くなり 医院存続に向けて奔走

新井川真佐子氏

医療法人秋桜会事務局長



にいがわ・まさこ●結婚・出産後、しばらくは専業主婦。3人出産後、30歳で医療業界へ就職。医療事務として内科のパート勤務からスタートし、複数診療所で23年間事務主任・事務長・地域医療連携室勤務などを経験。前職勤務時代に現法人の前理事長から声をかけられたことから、事務局長に就任

び、開業2年目に医療法人化しました。しかし、次は医師2人体制を整えようと計画していた3年目の18年9月、外出先で交通事故に遭い、還らぬ人になりました。

法人トップであり、分娩を取り扱う当法人唯一の常勤医師が亡くなり、成長から一転、「閉院か、存続か？ それを誰が決めるのか？」の突然の選択に、頭が真っ白になりました。ただそれでも、法人理事第2権利を持つ私は、決断をしなければなりませんでした。

私は、迷わず「存続」を決意しました。地域の皆さんの幸せのため、毎日働いてくれているスタッフのため、そして、志半ばで天国に行ってしまった尾崎前理事長の遺志をつなぎたいという思いがあふれてきたからです。スタッフと励まし合い、まずは当院で分娩予定だった妊婦さんの転院先探しから始めました。その間も外来診療を1日も絶やさぬよう、非常勤医のご協力のもとシフトを組んだほか、経営状態を安定させるため、近隣の急性期病院と連携し、産褥入院の受け入れも始めました。

当時、一番のミッションは、常

勤医師を見つけ、分娩を再開することでした。事務長会の皆さんにも相談し、いろいろな人材紹介会社に登録したり、人脈をフル稼働して独立を視野に入れた産婦人科医を紹介してもらったりして、約30人の医師と面談させていただきました。尾崎前理事長のビジョンを伝え、共感してもらえるかが最大のポイントだったので、短期間勤務でお互いの相性を見る試行期間を設けたりもしました。

そして、理事長の死から2カ月後、事務長会顧問からの紹介で「遺志を継ぎます」と言ってくれる医師と出会うことができ、19年4月から新院長に中村涼医師を迎え、分娩を再開しました。

産婦人科は24時間365日いつでも分娩が始まるかわからない状況下で診察せねばならず、医師は「常に忙しい」状態です。そこで、院長には診療に専念してもらい、それ以外は私たちスタッフを信頼し任せてもらえる関係を築こうと努力しています。そのため、毎週役員会議を開き、経営については連絡・報告を密にして、少しでも時間があれば院長とコミュニケーションを図るようにしています。

前理事長の志を継ぎながらも、新院長の個性を引き出して、地域に密着した診療所をつくっていきます。

一般社団法人診療所事務長会

<https://cl-manager.com/>

2016年1月発足の診療所事務長の会。診療所事務長や院長などが集まり月1回の勉強会を開催しているほか、日々の仕事についても互いに助け合っている

当 法人は分娩可能な産婦人科有床診療所(12床)で、常勤・非常勤を含めて医師、助産師、看護師、保育士、助手、事務の30人のスタッフで24時間365日稼働しています。私は、2015年5月の新規開業時から事務長として開業準備に携わりました。土地探しから設計、建築、採用から教育まで、故・尾崎敦男前理事長とともに進め、開業した日のよるこびは今も忘れることができません。

以後、各種届出から経理、労務、人事、庶務と管理部門の全般を担当し、現在は各業務を見守り、管理する肝っ玉母ちゃんのような存在を目指して仕事をしています。

尾崎前理事長は当時60歳での開業でしたが、先を見据えて10年計画も立て、業績は少しずつ伸